

翌二十年八月、日本敗戦で滿蒙の天地動転、幾度か死

線をさまよい、危険を冒して満州から北鮮を潜り抜けて南鮮にたどり、ようやく生気をとりもどして日本に引揚げられた。世に珍しい運の強い男である。

しかし、彼は運が強いだけではない。南鮮から日本まで見ず知らずの老婦人の家族を連れて荷物を二個も背負い一緒に引き揚げに協力したことは、あの戦乱の焦熱地獄の場で実践されたことは正に神や仏の仕業である。こうした涙ぐましい情念の日高氏である。

少年時代より今日まで、満鉄の対滿開発事業は、北歐開発に似たる偉大な繁栄しているさ中にも、奥地から馬賊の跳梁にも遇い、ひいては満州事変から、博儀皇帝の満州建国へと滿蒙天地の有為転変の現実に遭遇し、肌身に体験しておられながら、決して自ら誇ることのない謙讓の士である。

かつて引揚者県連合会の団体運動は藤浦会長亡き後は、有名無実化したのを憂い、日高氏は県当局や同志と相協力しあい、宮崎県連を建て直されたことは彼の人物によるものである。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

私の戦争体験

沖繩県 平良 武雄

日本政府は移民を奨励していた時分だったので、私は昭和十七年にお国のために、食糧増産の先遣隊として満州に派遣してもらった。

しかし、満州でソ連軍の不法侵略にあい、戦争となり、男性は十八歳から五十歳まで、ことごとく召集をうけて、のこった婦人、子供、老人ばかりになったので、言葉に絶する惨状となった。塗炭の苦しみとはこのことと思う。

私は軍人に召集され、軍務に服していたが日本敗戦となつてから、ソ連軍に逮捕され、捕虜としてシベリアに抑留となつて惨憺たる目にあつた。幾度か死に直面したが、不思議に生きて舞鶴港に引揚げた。

一 戦争ほど下等な争いはない

一 戦争は最大の残酷な争いである

一 戦争は人を野獣に変える

軍国主義日本の行動が、こうも世界を相手に戦わねばならなかったのか、余りにも無謀な行動に出た日本、国際連盟を脱退した当時、外務大臣松岡洋右の行動は余りにも横暴であった。日本は国土が狭く耕地面積が無く、当時の政府は耕地面積のゆとりのある国を探し移民を推進していた。その時中国大陸満州にも目を付けた。そこへ食糧増産の先遣隊が派遣されたのが昭和七年、私も十七年に移民に応募したのである。

戦争が身近に迫ってきたのが昭和十九年の末ごろのこと、ソ連政府が不可侵条約を破棄して、満州侵略へ行動開始したとのうわさであった。時をへて開拓団の中から、五く六人、七く八人と召集されるようになり、ただならぬ雰囲気が開拓地全体を揺り動かしていた。一番の心配は、命にも等しい薪の確保と食糧をどうするか、食糧も割当てにほとんど抛出し、手持ちが一週間ほどしかないと騒ぎ出す婦人たち、急な召集令

状が渡ったため、配給の手配が届かぬせいであった。冬を目前に薪の確保は食糧以上に必要欠くべからざる難問題であった。時は流れ難問が続出した。

男たちは、十八歳から五十歳までが召集を受けた。残ったのは婦女子ばかり。ある日母親たちは山へ、家に残ったのは幼な子ばかりだった。外は零下三十度、親たちが山から薪を運んでたどり着いて驚いた。子供たちは口もきけぬほど冷えきっていた。ガラス窓には小さな手の跡が白く凍りついていて、いかに寒さに耐えていたか、想像を絶する。指先を切断する子は一生かたわで生きねばならず、その数、数十人、日本から初めて来た家族などは、防寒の経験がなかったせいのこと事故だった。泣くに泣けない哀れな経験は一日でも早く、はってでも日本に帰りたいと、騒ぎ出す始末。けれど押し寄せる戦争のまえには、なるがまま、なせるがままの日日でしかなかったのである。

昭和二十年六月召集を受け、チャムスに集合、そこで松下中隊長の命で特務機関に配属になり勤務に就く。訓練なしの勤務は、どなられどうしだった。命令を受

領し各中隊に、伝達の仕事だった。すぐに命令があるのでなく、将校連中の中で、退屈な時間をつぶしていた。その時ちょっとした論争が起こった。ある中尉が言葉の端をとらえ、「戦争とは敵を全滅させるためにあるのではなく、降伏させるためにある」と言いきっていた。ある者は、生かして帰せば見返りを受けるだけだと言ひ、全滅が無難だとも言ひ声もあつた。時代が時代だけに、なかなか勇氣のいる言葉だと、私など思つた。

連なる山脈の下の、古ぼけた部落を、日本軍が占領した。小さな村の中で一番大きな茅葺きの家が指令室になつてゐた。ある日の夕方、ソ連の戦闘機三機が山手の方から低空でやって来て、機銃掃射を始めた。これでおしまいと思つたが、この三機の目標はここではなく、近くの小高い丘の小屋を目標に、三機がかわるがわる撃ちまくって引き上げて行つた。この中に二〜三人の特別運の良い奴がいるのかねと、上官の口から冗談がとび出る始末、毎日が命をかけての戦闘なのに、こうしたのんきな日もあるもんだと、これも思

い出話のひとつでした。

チャムスの街から、北へ六キロほどのところに、日本人の経営する農事試験場があつた。ある日そこを通り抜けるため、四千人ほどの隊員が試験場にさしかかったら、素裸の日本婦人八人、年令三十代の女盛り、顔は真っ青になつて泣きながら助けを求めて来た。皆を毛布で巻き、落ちつかせてから事情を聞いた。すると、男一人もいない日本人婦女ばかりの開拓村へ満軍兵士と一般人男子が数千人やつて来て、生きたまま婦人や子供たちを手当たり次第に井戸の中へ投げつけている、それに時分たちも人の面前で何十人もの中国人に暴行を受け、すんだら向こうへ行けと日本人部隊を指して追い払つたと、がたがた震えながら語つた。兵隊さんたちこの姿を見てくれと、泣き叫ぶ彼女たちを見て、血氣盛りの日本軍人はたちまち血の氣が逆上、隊長から「あの部落、一軒残らず焼き払え」との命令が下つた。兵は一斉に行動開始、藁葺きの家に石油をかけて次々火をつけてまわる。中から住民が、男女子供と飛び出す。それを追いかけ、とつかまえて、燃

える炎のなかへどんどん、二人一組になって投げつける。炎の中で曲がりくねって人は燃えて行く。血も情もないこの惨状をなんに例えよう。しかしこれは、生きたまま井戸へ投げ込まれ、泣き叫ぶ日本人婦人や子供たちの仕返し行動でした。

夕日は西に落ちかけ山道はうす暗く、丘へ上って小休止した。一応点呼をとり人数の確認、八百人ほどの兵と難民百人ほどでした。食事もとらぬまま、この山で一夜を明かした。ところが朝の四時ごろうす暗い時に、前方の満人部落の土壁から機関銃がこちらめがけて撃ち込まれてきた。隊は散開して林の中へ逃げ込んだ。我々は下の谷間へ集合、その中から十人希望者を募った。目的は前方の敵機関銃隊の全滅であった。私もこの中に加わった。毎日毎日伝令の任務で根尽き果てていたので、早く戦死して楽になりたかった。この十人は決死隊なので生き残れる道はない。人数の確認のため、右から番号の号令がかかる矢先、後ろから私の肩を力一杯引く張る者がいた。「平良さがれ」と太い低い声である。そしてすぐ代わりの者が出されて列

に並んだ。松本という朝鮮人であった。十人は五人がつ二手に別れて、コーリヤン畑の中へ走った。三十分ほどたった。満人部落の右と左から一斉に手榴弾の十個が爆発した。その後機関銃の音は消えていた。夜明けと共に隊は前進、途中部落の中を見てまわつたら、敵の機関銃隊はもちろん姿形もなく、味方の十人もバラバラで見分けがつかないほどだった。私の身代わりももちろんこの中である。思い出す度に慚愧に堪えない。昨日の戦闘で、隊員は消耗してしまった。何十人倒れたかは確認もないままであった。これが第一戦の姿である。

当隊は山から山へ移動を続けた。三日目の朝、多羅密川にさしかかった。当隊はその川を渡らねばならず、兩岸に針金を通しその一本をつかまえて一人一人渡るのである。後ろからついて来た開拓移民団四く五十人の婦人たちは、子供の手を引いては渡れないために、川岸に十四く五人の幼児をそのまま放置。運を天にまかせ川の中へ入る。とたんに流されて行く。下流の曲がり角には、赤ん坊をおんぶし腕にふろしき包み、全

員うつ伏せになって浮いていた。生きた者一人もなく、翌朝昨日の場所に来てみたら、十四く五人の幼児は、オオカミの群れに襲われたのか、顔から首、手足も骨だけ残されていて、下半身から腸が引つ張り出されていた。この惨状を見たとき、この世には神も仏もないものかと、つくづく思った。話によれば、島根県出身の開拓団員たちの姿である。

偶然、山からぬけることが出来たのは、昭和二十年九月二日であった。近くの満人部落からソ連兵の集団がやって来て、包囲されたのである。部落へつれて行かれ、ソ連将校から初めて、戦争がとうに終わっていることを知らされ、なんと無駄な苦勞をしたもんだと、皆が抱き合って泣いた。

あの広い広野に散在する移民団、ハルビンへハルビンへと移動して行く難民の群れをなんに例えよう、その数、何千何万の婦女子は力尽き果て、手を引いて歩いた幼な子は、次々に親の手を放れて泣き叫ぶ。体力と精神の限界の中、広野に我が子を置きざりにして別れて行く母親たち。涙一滴見せる者はひとりもないな

かった。これが残留孤児の始まりである。隊列が乱れるので小休止の命が下った。その時、側に座り込んだ婦人の言うには、私もチャムスの街角の塵捨て場に四歳の女の子を置いて来た。これから山道へ入るといので耐えられないと判断、それに塵と一緒に捨てるということではなく、塵捨て場ならなにか口にする物があるだろうと、思っていたことでした。とにかくなにか食べ物を与えたかったですと言ってうつぶいた。とにかくあの子たちを助ける神が現われることを祈らずには、いられなかった。その日の夕方、中国人のあいだに話題が広がった。どこそこの山道に捨て子が散在しているのと、中国婦人たちは聞いて、捨て子たちを拾って帰って来たという。八百人ほどの集団の中から出た捨て子たちである。あの広い満州、百八十か所の開拓移民村は同じ状況である。中国人婦人たちは、あの苦しい生活の中で敵国の子供たちを幾千人、いや幾万人育てたであろう。まさに人道に徹した、中国国民であるとの底から感謝するものである。今なお未解決のまま、終戦五十年近くも異国の地で暮らす日本

人の心境はいかばかりか、大切に育てられても自国に未練があるのは、人間本来の姿である。

昭和二十年九月五日、伊漢通港から約四個中隊が船に乗せられた。皆はダモイダモイ、日本に帰ると言い伝えられた。ところが船はその日の夕方、ハバロフスクの港に着いた。しばらくして夜明け前、下船が命じられ続いて貨車に乗り移り、出発の汽笛がけたたましく鳴りひびき、貨車はカタコトカタコト、動き出した。一週間ほどして、シベリア大森林の中で夜明けの静けさをやぶってけたたましく汽笛が鳴りひびき、貨車は止まった。下車してあたりを見たら、大きな倉庫が立ち並んでいた。革命当時の政治犯たちの重労働者の作業拠点で、千人ほどが住んでいたとのこと。井戸もあり、並んで用を足すため露天便所は一度に五十人も出来そうな造り、我々もそこを使用した。我々は一級罪人の身なれば致し方ない。露天の寒風の中、用を足す時の苦難は普通人には想像を絶する一時でした。入所二日目から大木の伐採、毎日毎日がノルマに追われた。割り当てノルマによって翌日のパンの量が違ってくる

ので、五人一組の一致団結は固く、二人びきの大ノコは根付き果てた。防寒具に身を固めての作業、真白い息を吐く姿は牛馬同様であった。時は過ぎ二年目の冬からは山で作業中、眠るように死んで行く者が毎日出た。飢えと疲労と寒さは体力の限界であった。一人の友人はノコ引く手を止め丸太の上に身を伏せ、かすかな声で故郷の母親の名を呼んでいた。近寄って「どうした、苦しいか、おーいどうした」と声をかけて見ると、うなり声と一緒に、「お母さん、お母さん」と呼びながら、次第に息絶えていった。この最後の声をお母さんに届けと、祈らずにはおられなかった。二三日が過ぎ石橋一等兵が、山から帰ったとたん転がるように床に就いた。食事もとらず、うなっている。寝床は私と並んでいたの、「どうした、おい、おい」と声をかければ返事がない。彼のために食事も枕元に置いてあるが手もつけていない、苦しうなっているがどうしようもない。こんな罪人収容所に医務室などあるはずがない、いつの間にか息絶えていた。哀れ彼は妻子もおる。東大の数学の先生だったと聞かされた。

中隊長の近藤熊助中尉もこの事を知って、ソ連の係官と同じく中尉シェンチェンコに話したら、特別はからいで中隊葬儀が行われた。伐採道路の横の切り株の側に雪を払いのけ、毛布にくるんで寝かせ雪をかぶせた。花岡上等兵は坊主の息子、彼の読経と中隊長の弔辞であつた。

弔辞 石橋上等兵 ここは日本から遠く離れたシベリアの地だ。寂しくもあろう。寒くもあろう。しかし君は日本軍人だ。耐えねばならん。君の冥福を祈る。中隊長近藤熊助。一同敬礼で葬儀は終わった。

私は今だに彼の一切の事は忘れていない。山仕事が一緒、班が一緒寝床まで一緒、朝と晩のめしも一緒、人生を語るのも一緒だった。彼とは、本当に一本の煙草も分けてのむばかりではない、お互いに、故郷の山や川の美しさを語りあい、優しい母の言葉など語りあつては涙を流し、死ぬときは一緒だと抱きあつた仲だったのに。彼は東京都出身、昭和二十年終戦の年で三十二〜三歳、眼鏡をかけ小柄な無口な召集兵であつた。もし彼の身内が御健在だったら、一切の事情を話

してあげたい。

そのころ毎朝、四〜五人の遺体が安置小屋から運び出され、夕方になると小型トラックが来て運ばれていった。一緒にトラックに乗った使役係の連中の話では、谷間に放り投げて来たと聞かされた。戦争に負けた国、その国民はいかにみじめであるかと強烈に肌で感じたものである。

昭和二十年の十一月ごろからソ連の係官将校の家庭で当番させられていた時があつた。家庭といつても、罪人収容所の係官の住む所はまるで地方の小屋同様だつた。しかし私にとつては、毎日伐採に行つてノルマに追い立てられるより、天国だつた。少しばかりソ連語が話せたのがさいわい。将校の家庭の仕事は薪割り水汲み、雪かきストーブの火起こしが主な作業、暇になると奥さんと雑談。主人は出て行く。いつも二人きりでした。主人は陸軍中尉名前をシェンチェンコ、奥さんはウーリヤンといひ二十一歳のかわいい人だつた。毎日期は部隊の中からゲートを通り二百メートルほどの家に通い、晩はその道を戻る。毎日三食、三人

で食事、同じテーブルを囲み仲良く食事をする。私は捕虜の身でありながら全く同じ家庭でした。戦友は山で極寒の中、大木との格闘の最中でも、こちらはストープにあたりながら美人と雑談では、全く皆に申し訳なく思った。この生活も、四か月で終わり私は山へ再び戻った。余りの生活の差なので、誰にもこの生活振りを帰るまで漏らしたことはなかった。

さようなら、スパシーバ。(ありがとうございました) 共産国は革命のためなら自国の国民でも逆らう者は容赦なく始末する、残虐な行爲があるが、それは指導者、権力者のみのやることで、一般市民は外国と同じ道徳心を持ち、人情あふれる民族であることが初めてわかりました。

昭和二十三年四月ハバロフスク近く、ウスリウ江の沿岸に、我々が伐採した大木が筏に組まれ、川一杯に流されていた。陸の上には大工場を思わせる製材所があり、川から流された木材をウインチで引っ張り上げる組と、製材機にかけ製品にする組、製品を片付ける組、それを列車に積み込む組と、作業は分担よく整理

され、たいへん能率的であった。ある日トラブルが起きた。近くの住民が、馬小屋を修理のため製材所から来た廃品二枚を、夜中盗んだという。年は五十歳ぐらいで、監視員に捕まり連行されて行った。隣の者から密告があったとのこと、全く情ない。共産国の罰則のきびしさは、たった木片二枚で二年も刑務所暮らしとは、なんと非人道的な権力主義のあさましさである。

我々捕虜も慣れぬ仕事のせいか人が続出し、ノルマが上がらぬため、割当ての食事が減らされたのが、なによりもつらかった。腹がへって寝つかれないので水をがぶ飲みする。飲むと便所に起きる。そうした時ほど故郷の母のことが思い出され、涙をふきふき夜を明かす時も度々あった。まるで子供のよう。側に寝ていた鳩ヶ谷一二三君も、寝返りばかりしている。「鳩ヶ谷どうした」と聞けば、「青森のお母さんの夢に起こされた」と言って寂しそう。忘れて寝ようと耳うちして寝た。ところが、その朝起床したら、鳩ヶ谷がない。朝になって、班内が大騒ぎ、警備員が入って来ていろいろ聞かれたが、何も知らんの一点張りで通

した。逃亡兵が出たことが收容所内に広がり、えらい勇氣と感心する者、逃亡は絶対成功しない、とうとう話題になった。しかし三日目には警備兵に捕まり、山で殺されたことを知らされた。彼の出身地は、青森県津軽だった。ハバロフスクの街から近い收容所、ここからも栄養失調で亡くなる者が続出した。

昭和二十三年の夏ごろ、ハバロフスク郊外のれんが工場に、一個中隊が移った。同じく收容所といえ、鉄線が三重に張りめぐらされ、警備のきびしさはこの收容所よりひどかった。作業の行き帰り、ポケットの中まで調べる始末。ある一人の男、かぶっている帽子の中に、イワシの頭二個を塵捨て場から拾って来たという。昼めしの時焼いて食べるつもりだった。ソ連兵の塵捨て場だったので、拾えたのだ。我々日本兵の塵捨て場で、そんなもの拾えるはずがない。くれるものならだれでも喜んでもらっていた。捕虜のつらさはひもじさと、ノルマのきびしさである。でもそのイワシの頭二つは、警備兵にとりあげられたうえに、ビンタイパツくらったのだから、わりのあわないイワシ

の頭だった。彼は元兵長、彼が言うには、あのイワシの頭二つは自分の命を十日は伸ばしたのに、惜しいことをした。本当のカルシウム剤だった。

昼はれんが造り、土掘り、トロッコ押しかられんがの積み上げと、それこそノルマ達成に自分の体力のすべてを使い果たしての毎日なのに、夜は共産主義の勉強、午後七時から九時まで二時間の講義は実につらかった。進むにつれてむずかしく、マルクス、レーニンの歴史から資本論まで、続けているうち講義は面白くなってきて、民主主義と、社会主義を論ずるようになってきた。人間は不思議な動物で、軍国主義時代には、社会主義は社会も罪悪だと聞かされていたが、毎日講義を聞かされるとそのような思想に染まってゆくことに、初めて気がついた。私など、思想が三回変わった。軍国主義から、共産主義、宗教へと…。

戦時中は一番人間の尊いことは、天皇陛下のため国のため親兄弟のために死ぬることだ。二十五歳が最適だと教えられては、名誉の戦死こそ男と生まれたとるべき道だと、心の底から思いこんでいた。それほどに

強烈な教育であったわけだ。

ナホトカは日本へ帰還のためのソ連の最終結地で、シベリア全土から、毎年捕虜たちはやせこけた身体を引きずって、移動して来るのです。入ソの時から、半分の数に減らされてだ。山での死亡と、山で残された者もいた。ナホトカでは我々中隊は二週間ほど滞在、そこでは昼夜、マルクス論の講義だった。

ナホトカの港とはいうものの、すぐ海が見える所ではない。帰国のためにつくった幕舎に入れさせられた。ここには何百人いたものか、付近一帯には一万人もいるとか言っていた。港の近くの幕舎が詰まっているときは、数十キロも奥のところにある幕舎に入れさせていた。港から遠ざかった連中は、いつ帰国できるかわからない。一年も幕舎の仮住まいのまま待機させられているとか、全く気の毒で、心細い思いをしているだろうと思った。私たちは帰還部隊の第一分所だったので、非常に恵まれたほうだった。しかしまた、ここに入るとちょっと出られないなどとも言われていた。どういう組織になっているのかわからない。ただ、この

港には専属の共産主義を指導するものがいたのではなかったかと思われた。民主グループの最後の民主教育の仕上げる場所であったようだ。ハバロフスクからきている宣伝教育者のアジ・プロだったろう。つるしあげも多かった。私は波止場近くの丘陵を越えて小学校と思われる建物の壁塗り作業使役を命ぜられて行くところから真下にナホトカの港が見えた。この港へ帰還船が入ってくるのである。帰国が大体目の前にぶらさがっているので、みんなは気が軽く、鼻歌を歌いながら作業する者もいた。私も歌っていると、そばのソ連労働監督者も一緒にになって合唱するというような、和やかな空気で、作業使役は少しも苦しくなかった。一週間もこの作業が続いたが、突然いやな情報が入ってきた。それは日本船の入港がおくれているので、我々ももっと奥地に行って作業使役に服することになるとのことである。そんな馬鹿な話があるものか、今まであらゆる悪環境下で頑張りがつづけてきたのだし、しかも作業中でも精力的に民主運動を闘いつつたのだから、何とか優先的に帰国させなくては不公平になる。責任

者はグループを通じてソ連政治部にかけ合つたのである。ソ連政治部は、我々の主張を認めたようで、近く試験を行つて帰国を決定するとの快報が流れてみんな喜んだ。しかしソ連は、決めたあとから次々と変わるのは日常茶飯事なので、全く一喜一憂だった。滞在十日ほどして、講師が来て、「オイ皆、良く聞け」と叫んだ。「いいか、これから浜辺で一人ずつ質問する。答えられなかつたら日本に帰れない。うまく答えた者だけが日本に帰れるから、慎重に答えよ」との命令、そこでざわめきが起こつた。自分はもうだめだと落胆する者がほとんどであつた。それから一人一人、呼ばれて試験が始まる。そばでながめていると、右に行く者と左に行く者がいる。地獄極楽の別れ道。私の番がきた。小さい声が、耳の側に聞こえた。「いいか、よく聞け、

戦争の起こる原因を、簡単に答えよ」というのである。ある晩の講義が頭に浮かんだ。「自国の生産物資が多量生産され、過剰物資となつたのを外国に輸出する。同じことが別の外国にも起こる。輸出国を求めて販売合戦が始まる。ゆえに戦争に拡大されていきます」と

答えた。「よし。右だ。ダモイ（帰還組）」現代なら物笑いの種になりそうな答えて、無事帰還したのだから幸運である。

今日も暮れ行く 異国の丘に

友よつらから 切なかる

帰還船から夢の港、舞鶴港へ上陸したとたんに、棧橋のスピーカーから「異国の丘」が流れた。胸のときめきを押さえていた戦友たちは、「下船せよ」との命令と同時に、我先にと元氣百倍、飛び降りて行く。残酷な世界から解放され、我が日本の土を踏みしめて立つた時の感動は、筆で表せるものではない。近くに住む肉親たちは迎えにみえて、抱き合つて泣く姿。元氣でなあと別れて行く者。苦難の中で一緒に戦友たちとの一生の別れだった。今では五十年近く別れたきり、だれからも音信不通。別れた際に住所の確認がなかったせいだ。今でも時折思い出す。皆さん元氣でしあわせに暮らしているだろうか。

足かけ九年振り、我が郷土を尋ねた。昔の宮古島の部落は、村ごとに疎開されていた。戦争の強制疎開後

は、軍用飛行場が変わっていた。昔、隣りだった人に連れられ、新部落を尋ねた。山手の方で四軒建っていた。初めて家族のもとへ。家の中は角ランプの光で薄暗く、兄貴一人だった。「お帰りなさい。元気で帰れたね」「兄さんも元気だったね」「ところでお母さんは」と聞くと、「あちら」と一言。不審に思い、マッチで照らしてみたら、真新しい位牌。これがお母さんか。死んだことも知らずに尋ねてみた母の姿。その場で泣きくずれた。話によれば、終戦当時マリアで倒れた。死ぬまで私の名前を呼んでいたという。右手にはシベリアからのハガキを握りしめて、息を引きとったとのこと。翌朝埋めた場所を一人で尋ね、つるはしで入口を起こして中へ入ってみた。頭蓋骨を拾い、「武雄は今帰った。お母さん」と泣くだけ泣いた。私は叫ぶ。この地球上に再び戦争が起きてはならんと。

【執筆者の横顔】

平良氏は宮古島の住人、幼少のときから賢い利口だと言われて育ち、小学校に入ってからめきめき学術

優秀な成績であるところから本人はもちろんのこと、受持ちの教師も進学させたかったが、当時の家計は、それを許さなかった。しかし少年平良氏は、進学できないことなど、何の不平不満もなく、家は貧しいからとも言わない。

小学校を出て家事を手伝ったり、他家へ手伝いにゆく、どこへでも明朗に勤務していた。しかも夜は夜間学校や通信教育で一生懸命努力する姿は、当時の若者の間では模範的独学青年と評判だった。

長じて成年を迎えて将来、わが行く手を考えた平良氏は、せまい沖繩で耕地を求めることは至難中の至難である。当時の政府は満州開拓を奨励していたので、それに応募して合格した。開拓団に入植し、広漠たる満州大平野の開拓に壮大な計画を抱いて働くことができた。

多少、会計事務に携わった経験が買われて団本部の経理担当の経理課長補佐に任ぜられた。希望はますます胸がふくらむばかりである。

ところが、昭和十九年、召集令状が下附され、佳木

斯の特務機関勤務から指揮班に転属となって働いているうちに、日本敗戦の悲報に平良氏ら兵一同は驚愕し悲憤の涙をながした。

のみならず、ソ連軍の捕虜となり三年間シベリアに抑留され、食事悪から栄養失調になり、これまた非人間扱いの労働を強いられたが不思議に生還できた。正に神仏のおかげであると彼は言っている。引き揚げて三十二歳のとき結婚、米軍のPXで経理事務を担当して二十年勤務し、息子三人は成人してそれぞれ家庭をもち、平良老夫婦は今なお健在で雑貨商店を営んでいる。性格きわめて誠実、人から頼まれれば力の限りを尽くしてお世話しておられる、地区の社会福祉に、防犯交通安全に犠牲的になって協力しているので、公共団团长や警察署長から感謝状や表彰状をうけて掲額しておられる、この地方の功労者である。

平良氏曰く「人間、大学出るよりも、苦難大学を出た方が世の中のためになる」と結んだ。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助